

新出資料紹介 柳田文庫蔵『夢窓道歌』

— 「東山殿西指庵障子和歌」（仮称）の全貌 —

西 山 美 香

花園大学国際禅学研究所柳田文庫（柳田聖山氏旧蔵）に、「夢窓道歌」なる外題をもつ一冊の夢窓疎石家集（写本）が所蔵されている。所収されている三〇首の和歌を検討した結果、同書は、これまで井上宗雄氏や大鳥一馬氏、そして稿者によって、検討・報告された夢窓家集のいずれの系統にも属さず、新出歌を含むことが判明した。

また何より注目されるのは、同書はその跋文に、東山殿（銀閣の通称で知られる慈照寺）内に建てられた「亭」の障子に貼られた和歌色紙の「中書」であると記されていることである。東山殿の様子について記された『君台観左右帳記』や『御飾記』などによれば、夢窓の和歌の色紙が貼られた障子があったのは、西指庵という建物であることがわかる。すなわちこれまでその存在だけは知られながらも、その内容は不詳とされてきた「東山殿西指庵障子和歌」（仮称）の全貌が、同書によってはじめて明らかとなったのである。

ただし残念ながら、現在西指庵は失われ、同書が「東山殿西指庵障子和歌」であることを完全に証明することはできない。しかし現在のところ、同書が「東山殿西指庵障子和歌」であることを否定する材料は、管見に入るかぎりでは見出せず、本稿では同書を「東山殿西指庵障子和歌」として紹介したいと思う。もしかたえ同書が「東山殿西指庵

障子和歌」に仮託されたものであるとしても、それにふさわしいものとして編まれたとすれば、東山時代に享受された夢窓疎石の思想・文芸の、そして東山殿西指庵の性格について考えるうえで、同書が貴重な資料であることは変わらぬと思われる。

本稿では、いささかの書誌的事項を付して、その翻字を掲げ、本文のみを紹介し、その内容については、今後引き続き調査を続け、次稿を期したいと思う。

書誌的事項および本文翻刻

《書誌的事項》

花園大学国際禅学研究所柳田文庫本(柳田聖山氏旧蔵) W189-421/1

外題 夢窓道歌(表紙左上に打付書) 表紙 山水に松(紺地金泥描) 表紙見返し 金

寸法 縦十九・六センチ・横十五・七センチ

袋綴じ本 全十九丁 墨付き十六丁

伝飛鳥井栄雅(雅親)筆

跋文あり(本文と同筆か) 奥書なし

一面一首の散らし書き

《翻字》

「夢窓道歌」(便宜上、歌番号を付した。※は新出歌。)

- 1 わかやとをとふとはなしに春のきて庭に跡あるゆきのむらぎえ

- 2 七そちの、ちの春までなからへて心にまたぬはなをみる哉
- 3 たれもみなはるはこれとてあそへともこゝろの花をみる人そなき
- 4 ちれはとて花はなけきの色もなし我ためにうきはるのやまかせ
- ※5 人とは、いか、こたへんわかやとの花ちるころの春の夕暮
- 6 吹ときはなかく、雲にた、よひてよはるあらしに花そちりける
- ※7 露ほともこゝろわか身にあるならはいつかなけきのなみたかはかむ
- 8 世をすて、のちはなかぬものならは月にこゝろやしはしのこらむ
- 9 いまはた、心にかゝる雲もなしのかれきてみるみ山への月
- 10 雲よりもたかき所にいて、みよしはしもつきにへたてやはある
- 11 いつるとも入とも月をおもはねはこゝろにかゝるやまのはもなし
- ※12 すみわたるこゝろの月によしあしとおもひみたれてくもりあらずな
- ※13 むねにすむ心の月をみてしかはゆひのしるへをなに、かはせん
- ※14 くもはれてのちのひかりをおもふなよもとより空に有あけのつき
- 15 とふ人のなさけのふかきほとまてはつもりもやらぬにはのしらゆき
- 16 むすひしにとへる姿はかはれともみつのほかなる氷あらしや
- ※17 ものことにそのみなもとのおくまてはこゝろことはもよはさりけり
- 18 我のみとかしこかほなるはかなさよはかなかりせはかしこからまし
- ※19 中／＼に人のおほきをやまにしてみやこのうちそ身はかくしよき
- 20 わすれてはよをすてかほにみゆるかなのかれすとてもかすならぬ身を

- 21 世をそむく我あらましの行すゑにいかなるやまのかねてまつらむ
- 22 身ひとつは山のおくにも有ぬへしすまぬ心そおきところなき
- 23 おもへともかなはぬ事はねかはれてすつるにやすき世をはいとはす
- 24 さま／＼にとけともとかぬことの葉をきかすしてきく人そすくなき
- ※ 25 いふもとかいはぬもあしき法のみちとふ人あらはいかゝこたへむ
- 26 さとりとてつねにはかはるこゝろこそまよひのうちのまよひ成けれ
- ※ 27 まよふそと思ひけるこそ迷なれたちもはなれぬものとみやこそ
- ※ 28 心より法のみちにはいるものをほかにふみみていかゝしるへき
- ※ 29 夢そともおもはさりせはいかはかりうつゝにものゝかなしからまし
- 30 たのしみの中にまことのたのしみは物をおもはぬ我こゝろなり

この三十首のうたは夢窓国師
の歌なり東山とのに西芳寺の

おもかけをうつさせおはしまして

たてられたるちんの御障子に

をされたる色紙の中かきなりある

ひは集に入たるもあり或はうつし

をかれたる歌ともうちなり猶

これにもれたるもありぬへけれと

たしかなるをのみか、せらる歌も
 上すにておほくは仏法く□ふ^{ふぶ}
 の心世中のつねのことほりなど
 みな心あるさまのうちともなり見
 侍らん人もふかくそのこゝろを
 さとりしるへきたよりも□侍^{成力}
 ぬへし

註

(1) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 南北朝期』明治書院(一九六五)、大鳥一馬「大阪市大森文庫蔵本『夢窓疎石御詠』について」『文学史研究』十六(一九七五・九)、井上宗雄「『夢窓国師百首』について」『立教大学日本文学』四七(一九八一・十二)、西山「法語になつた夢窓疎石の和歌—『夢窓国師百首』を中心として—」『玉藻』三一(一九九六・三)など。

(2) 「東山殿西指庵障子和歌」(仮称)については『原色茶道大辞典』淡交社(一九七五)にすでに次のような言及がある。夢窓国師は禅宗の和風化を進め、わが風土に根づかせたが、同じく禅宗文化の和風化の推進者として知られ、喫茶の風流化、すなわち茶湯の開化に大きく貢献した。一時は茶湯開山として追慕されたのである。国師は和歌を愛好した。かくて「和魂漢才」を主張する王朝貴族の風流生活を慕い、和漢教養の兼帯から進んで和漢教養の兼帯を説き、なおその実践に努めた(略)

その著書『夢中間答集』は足利直義(尊氏の弟)の要請に答えて禅道修行の心得を教えた書物だが、ここで詩歌管弦および山水の愛好も禅道修行の資となるべきを説き、その隠居寺として西芳寺を幽玄の閑境に営んでこれの実践をはかった。山水の美を誇る西芳寺の厳存と『夢中間答集』の流布とが国師の名声と相まって、国師は教学の師たるのみならず、

和漢兼帯の文化人の権化として追慕された。(略)

將軍義政時代、(夢窓) 国師追慕が一段と強まったのと関連して、国師の和漢兼帯が当代文化の道標となるし、茶湯が和漢兼帯の具現とされ、これまた国師の遺風として親しまれた。義政は国師の再生者として自らを任じ、国師の行住坐臥を模したのである。東山山荘生活は、これの宿願を達したものだし、(略) 『御飾書』の記すところだが、東山山荘の座敷は開山(夢窓) 墨跡で飾られた。そのうち、飛鳥井榮雅筆の国師道歌色紙も見える。

閲覧・紹介の許可を賜った花園大学国際禅学研究所に心より御礼申し上げます。

本稿は、一九九八年六月二〇日(土)に行われた、フェリス女学院大学院院生発表会、ならびに同年十二月十九日(土)に行なわれた第六十九回禅学研究会学術大会(於…花園大学)における口頭発表を成稿化したものである。